

『大乘莊嚴經論』における種姓の存在根拠

— 「種姓品」第2偈を中心に —

岡田 英作

はじめに

種姓 (gotra) という概念は、瑜伽行派において般涅槃への到達や菩提の獲得に関する潜在力や資質を意味し、初期瑜伽行派の根本典籍『瑜伽師地論』(Yogācārabhūmi) を端緒に著しい展開を遂げる。同論書の一部を成す「本地分」の第15地『菩薩地』(Bodhisattvabhūmi) は、初期瑜伽行派論書『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrāṃkāra) と構造上の共通性を有することがすでに知られ¹、両論書ともに種姓について、ひとつの章を割いて詳述する。したがって、瑜伽行派における種姓説の発展形態の解明には、『瑜伽論』『莊嚴經論』を厳密に検証しなければならない。

両論書における種姓説の展開について²、拙稿 [2011] では、種姓を主題とする『菩薩地』第1章「種姓品」(Gotra-pāṭala) および『莊嚴經論』第3章「種姓品」(Gotrādhikāra) を比較対照して、後者が前者に基づくことを指摘した。それを踏まえ、拙稿 [2014] では、『莊嚴經論』における『瑜伽論』の種姓説の受容をめぐる、『莊嚴經論』「種姓品」各偈頌の所説と『菩薩地』およびその他の『瑜伽論』の種姓に関する教説の対応関係を整理することで、『莊嚴經論』「種姓品」は、『菩薩地』「種姓品」の構成や内容に依拠しながら、『菩薩地』やその他の『瑜伽論』に散在する種姓に関する教説を統合し、種姓説の体系化を推し進めていることを指摘した。さらに、『瑜伽論』に対応のない『莊嚴經論』「種姓品」の種姓説を踏まえ、「種姓品」各偈頌の種姓説が同論書で如何に展開するかを整理することで、同論書独自の種姓説を、「種姓品」内で展開するものと外で展開するものという2つの視点から明らかにした。

以上のように、筆者は、『瑜伽論』から『莊嚴經論』への種姓説の展開に関して、教説の対応関係という観点から解明してきた。しかし、両論書の間で種姓説の項目上の対応が認められながら、各項目に対する解説においては、対応する『瑜伽論』の教説と『莊嚴經論』に対するヴァスバンドウ (Vasubandhu) の註釈 (Mahāyānasūtrāṃkārabhāṣya) との間で内容が相違する場合がある。すなわち、『莊嚴經論』の偈頌に対して、偈頌の成立前か後かで2通りの解釈が可能であり、両解釈の相違点において、ヴァスバンドウの註釈の独自性が見出され、同註釈以降の種姓説の展開が解明できると考えられる。

本稿では、「種姓品」の中で、種姓の存在すること (gotrāstitva) を主題とする第2偈を取り上げる。まず、同偈頌において種姓の存在根拠として挙げられる4項目が如何に説示されるかを確認する。次に、『莊嚴經論』の偈頌の成立前として、4種の根拠の源泉を『瑜伽論』に辿り、『瑜伽論』の教説に基づいて、4種の根拠と種姓との関係を考察し、『莊嚴經論』の偈頌の成立後として、ヴァスバンドウの註釈に基づいて、両者の関係を考察し、同偈頌に対する2通りの解釈の可能性を提示したい。さらに、両解釈を比較することで、ヴァスバンドウの註釈の独自性を見出し、彼以降の『莊嚴經論』に対する註釈を踏まえ、彼の註釈以降の種姓説の展開を明らかにしたい。

1. 『大乘莊嚴經論』「種姓品」第2偈

『莊嚴經論』「種姓品」は、第1偈において第2偈～10偈までの主題を列挙した後³、第2偈において種姓の存在することを主題として、種姓の存在根拠を4種説示する⁴。まず、第2偈の所説を確認しよう。なお、本稿で引用するサンスクリットテキストに関して、分節記号(/)の訂正は、註記せずに適宜行った。

MSA (Skt.) MSA_L 10.13-14, MSA_F 20.9-10, cf. (Tr.) Thurman [2004: 23], 長尾 [2007: 68]:

dhātūnām adhimuktes ca pratipattes ca bhedataḥ /
phala-bhedôpalabdhes ca gotrâstitvaṃ nirūpyate // III.2 //

[和訳] (1) 要素と (2) 性向と (3) 修行の区別に基づいて、そして、(4) 結果の区別が認識されることに基づいて、〔三乗の〕種姓の存在することが確認せられる。

『莊嚴經論』は、種姓の存在根拠として、(1) 要素 (dhātu) ・ (2) 性向 (adhimukti) ・ (3) 修行 (pratipatti) ・ (4) 結果 (phala) の4種を挙げ、各々に区別が認められることから、種姓の存在することを述べる。種姓とは、声聞・独覚・菩薩 (あるいは仏陀や如来や大乘)⁵ という三乗の種姓を意図すると考えられるが、第2偈に三乗の種姓に関する記述はない。同偈頌における種姓を三乗の種姓と理解するには、『瑜伽論』における三乗の種姓を説く教説を踏まえるか、あるいは、後で取り上げる『莊嚴經論』に対するヴァスバンドウの註釈に依拠する必要がある。また、種姓の存在根拠のひとつに数えられる adhimukti という語は、多義であるため訳語を統一し難い⁶。本稿では、或る乗に対して潜在的な adhimukti を「性向」、修行者自身の表明した adhimukti を「確信」という語に訳し分けた。

同論書はまた、「種姓品」の主題を列挙する第1偈の後、まず初めに、種姓の存在することを取り上げる。したがって、種姓の存在根拠を示し、三乗の種姓の存在を明らかにすることを、種姓に関する説示の中でも重視していると考えられる⁷。

2. 『瑜伽師地論』における種姓の4種の存在根拠に関する源泉

『莊嚴經論』の偈頌の成立前として、種姓の4種の存在根拠に関する源泉を『瑜伽論』の如何なる教説に辿ることができるか、各根拠との対応が見出される『瑜伽論』の教説を確認し、4種の根拠と種姓との関係を見ていこう⁸。

まず、『莊嚴經論』「種姓品」第2偈は、『菩薩地』「種姓品」において、菩薩種姓を備えた菩薩の卓越性を、声聞や独覚と比べ、4つの様相から解説する教説との対応が認められる。4つの様相とは、(a) 機根 (indriya)、(b) 修行 (pratipatti)、(c) 熟達 (kauśalya)、(d) 結果 (phala) であり、そのうち、(b) 修行および (d) 結果が、第2偈の (3) 修行および (4) 結果と項目上対応する。

BBh (Skt.) BBh_{wo} 3.20-4.12, BBh_p 2.16-26, cf. (Tr.) 相馬 [1986: 7]:

api ca caturbhir ākārair bodhisattvasya śrāvaka-pratyekabuddhebhyo viśeṣo veditavyaḥ / katamais̄ caturbhīḥ / indriya-kṛtaḥ pratipatti-kṛtaḥ kauśalya-kṛtaḥ phala-kṛtaś ca / ... tatrāyaṃ pratipatti-kṛto viśeṣaḥ / (śrāvakaḥ pratyekabuddhaś¹⁾ cātma-hitāya pratipanno bhavati, (bodhisattvo 'py²⁾ ātma-hitāyāpi³⁾ para-hitāya bahu-jana-hitāya bahu-jana-sukhāya lokānukampāyā arthāya hitāya sukhāya deva-manuṣyāṇām / ... tatrāyaṃ phala-kṛto viśeṣaḥ / śrāvakaḥ śrāvaka-bodhi-phalam adhigacchati / pratyekabuddhaḥ pratyeka-bodhim adhigacchati / bodhisattvo 'nuttaraṃ samyak-sambodhi-phalam adhigacchati /

¹⁾ śrāvakaḥ pratyekabuddhaś BBh_D, ²⁾ bodhisattvaḥ apy BBh_D, ³⁾ ātmahitāya api BBh_D.

[和訳] さらにまた、菩薩には、4つの様相の点で、声聞・独覚たちに比べて卓越性があると知られるべきである。如何なる4つの点でか。〔すなわち、〕(a) 機根に関することと、(b) 修行に関することと、(c) 熟達に関することと、(d) 結果に関することとである。... その中で、(b) 修行に関する卓越性は以下である。声聞と独覚は自利のために修行する者であり、菩薩も自利のためのみならず、利他のために、〔すなわち、〕多くの人々の利益のために、多くの人々の安樂のために、世間の者たちに対する哀愍のために、神々と人間たちとの目的のために、利益のために、安樂のために〔修行する者である〕。... その中で、(d) 結果に関する卓越性は以下である。声聞は声聞菩提という結果に到る。独覚は独覚菩提〔という結果〕に到る。菩薩は無上正等菩提という結果に到る。

『菩薩地』「種姓品」の教説は、三乗の各種姓を持つ者を4種の観点から比較する。その中で、(b) 修行とは、自利・利他を目的とし、声聞と独覚が自利のみ、菩薩が自利・利他のために修行する。したがって、(b) 修行では、声聞種姓と独覚種姓を区別できない。また、自利・利他のために修行する、という『菩薩地』「種姓品」の記述は、「本地分」の第13地『声聞地』(Śrāvakabhūmi)「第三瑜伽処」冒頭の弟子の入門審査に、ほぼ同文がある。瑜伽を知る瑜伽者(yogin)が、瑜伽を請願されて、瑜伽作意に専念しようと願う者(yoga-manasi-kāre prayoktu-kāmaḥ)を称讃する箇所である。

ŚrBh (Skt.) ŚrBh_{T3} 13.5-11, cf. (Tr.) 声聞地研究会 [2008: 15]:

adya tvam āyusmann ... ātma-hitāya pratipannaḥ para-hitāya bahu-jana-hitāya bahu-jana-sukhāya lokānukampāyā arthāya hitāya sukhāya deva-manuṣyāṇām iti /

[和訳] 「今、長老よ。あなたは、... 自利のために、利他のために、〔すなわち、〕多くの衆生の利益のために、多くの人々の安樂のために、世間の者たちに対する哀愍のために、神々と人間たちとの目的のために、利益のために、安樂のために修行する者である。」

『声聞地』「第三瑜伽処」において、瑜伽作意に専念しようと願う者は、自利・利他のために修行する者と称讃されるが、三乗の修行者のうちの何れであるか明示されない。上掲のような文言は、少なくとも菩薩だけに対して述べられるものではないであろう。次に、(d) 結果とは、声聞・独覚・無上正等菩提という3種の菩提である。

さらに、『菩薩地』「種姓品」に対応のない(1)要素および(2)性向は、『瑜伽論』の他の箇

所に対応が見出される。まず、(1) 要素は、第 28 章「建立品」(Pratiṣṭhā-pāṭala)において、仏陀の持つ十力のひとつである種種界智力の解説として、種々な種姓の設定と八万にも上る衆生の行とが種々な要素を有するものである、と説く箇所に対応がある。

BBh (Skt.) BBh_{wo} 388.24-389.1, BBh_D 268.11-13, BBh_I 356, cf. (Tr.) 那須 [2010: 41]:

nānā-gotra-vyavasthānaṃ śrāvaka-pratyekabuddha-tathāgata-gotrāṇāṃ rāgādi-carita-prabheda-nayena ca yāvad aśīti¹⁾ sattva-carita-sahasrāṇi nānā-dhātukatēty ucyate /

¹⁾ aśīti BBh_D.

[和訳] 声聞・独覚・如来種姓の種々な種姓の設定と、貪等の行の分類の仕方によって、八万にも上る衆生の行とが、種々な要素を有するものと言われる⁹⁾。

『菩薩地』「建立品」の教説は、衆生の持つ三乗の種姓や貪等の行の両者をまとめて種々な要素と述べ、第 2 偈との関連として、声聞・独覚・如来種姓と種々な要素という用語が見出される。要素とは、『瑜伽論』において種姓の同義語に数えられ、このような考えは、説一切有部の説にも確認できる¹⁰⁾。

次に、(2) 性向は、第 20 章「分品」(Pakṣa-pāṭala)において、菩薩は衆生の持つ種姓・機根・性向に応じた三乗各々の教えを説示する、と説く箇所に対応がある。

BBh (Skt.) BBh_{wo} 309.1-3, BBh_D 212.15-17, BBh_I 30:

(tribhir yāna-kausalyair¹⁾ bodhisattvo²⁾ yathā-gotrēndriyādhimuktīnām³⁾ tad-upamaṃ⁴⁾ dharmam deśayati, anukūlām yuktiṃ vyapadiśati /

¹⁾ 磯田・古坂 [1995: 515, #26-1] の指摘する写本の読み (tribhir yāna-) に従う ; *tribhinnaṃ kauśalyair* BBh_D, *tribhir yānaiḥ kauśalyair* BBh_I, *yānatrayakauśalyena* BBh_{wo},

²⁾ *bodhisattvaḥ* BBh_{Iwo}, ³⁾ *yathāgotrendriyādhimuktānām* BBh_D, ⁴⁾ *tadupamaḡamaṃ* BBh_I, *tadupamāḡamaṃ* BBh_{wo}.

[和訳] 三乗に関する熟達によって、菩薩は〔衆生の持つ〕種姓・機根・性向の通りのそれと対応する教えを説示し、適当な道理を指し示す。

『菩薩地』「分品」の教説は、第 2 偈との関連として、三乗や種姓や性向という用語が見出されるものの、性向が種姓や機根と並列するため、性向と種姓の関係が明らかでない。両者の関係には、『声聞地』「第三瑜伽処」冒頭の弟子の入門審査が重要である。入門に際し、師匠は 4 種の方法を用いて、弟子の誓願 (praṇidhāna)・種姓 (gotra)・機根 (indriya)・行 (carita) の 4 項目について審査する。性向に関わるのは、物語による種姓の審査である。

ŚrBh (Skt.) ŚrBh_{r3} 20.8-22.4, cf. (Tr.) 声聞地研究会 [2008: 21-23]:

tasya purastāc chrāvaka-yāna-pratisaṃyuktā kathā karaṇīyā sphuṭaiś citrair gamakair madhurair vacana-pathaiḥ / sa tasyām kathāyām kathyamānāyām sacce chrāvaka-gotro bhavati, atyartham tayā kathayā prīyate hr̥ṣyata ānandī-jātaḥ saumanasya-jāto bhavati, prasīdaty adhimucyate / sacet pratyekabuddha-gotro vā mahāyāna-gotro vā bhavati nātyartham tayā kathayā prīyate na hr̥ṣyate nānandī-jāto na saumanasya-jāto bhavati, na

prasīdati nādhimucyate /¹¹ mahāyāna-pratisaṃyuktāyāṃ vā punaḥ kathāyāṃ kathyamānāyāṃ
yo mahāyāna-gotraḥ so 'tyartham priyate hr̥ṣyate yāvat prasīdaty adhimucyate / śrāvaka-
pratyekabuddha-gotras tu na tathā /

[和訳] 彼(弟子)の面前で、明瞭で多彩で理解し易く流暢な語り方で、声聞乘に合致した物語が為されるべきである。その物語が述べられているとき、もし、彼が声聞種姓を持つ者であれば、その物語によって、大変満足し、喜び、歡喜に満ち、喜悅に満ち、〔声聞乘に対して〕信心し、確信する(adhimucyate)。もし、独覚種姓を持つ者か、大乘種姓を持つ者であれば、その物語によって、全く満足せず、喜ばず、歡喜に満ち、喜悅に満ちることはなく、〔声聞乘に対して〕信心せず、確信しない。あるいはまた、大乘に関する物語が述べられているとき、大乘種姓を持つ彼は、大変満足し、喜び、乃至、〔大乘に対して〕信心し、確信する。しかし、声聞や独覚種姓を持つ者は、そのようにならない。

『声聞地』『第三瑜伽処』の教説に拠れば、弟子は、師匠による三乗に関する物語によって、自身の有する種姓と対応する乗に対して確信する(adhi-√ muc)。すなわち、種姓と性向・確信(adhimukti)の関係は、種姓が性向・確信の前提条件となる。

以上のように、『莊嚴經論』における種姓の4種の存在根拠と対応する『瑜伽論』の教説を整理すると、【図①】の通りである。

『大乘莊嚴經論』における種姓の存在根拠と対応する『瑜伽師地論』の教説

種姓の存在根拠	対応する『瑜伽論』の教説
(1) 要素 (dhātu)	『菩薩地』『建立品』
(2) 性向 (adhimukti)	『菩薩地』『分品』、『声聞地』『第三瑜伽処』
(3) 修行 (pratipatti)	『菩薩地』『種姓品』
(4) 結果 (phala)	『菩薩地』『種姓品』

【図①】

これらの『瑜伽論』の教説は、三乗の種姓の存在を前提として、4種の根拠となる項目の区別を述べる傾向がある。例えば、『菩薩地』『種姓品』の教説は、それを前提として、各種姓を持つ者を4種の観点から比較し、菩薩種姓を持つ菩薩の卓越性を主張する。したがって、4種の根拠から三乗の種姓の存在を主張する『莊嚴經論』『種姓品』第2偈とは論じる視点が異なる。『莊嚴經論』は、三乗の種姓の存在を前提とせず、「種姓品」でまず最初に種姓の存在することを規定するのである¹²。

2.1. 種姓の4種の存在根拠と種姓との関係

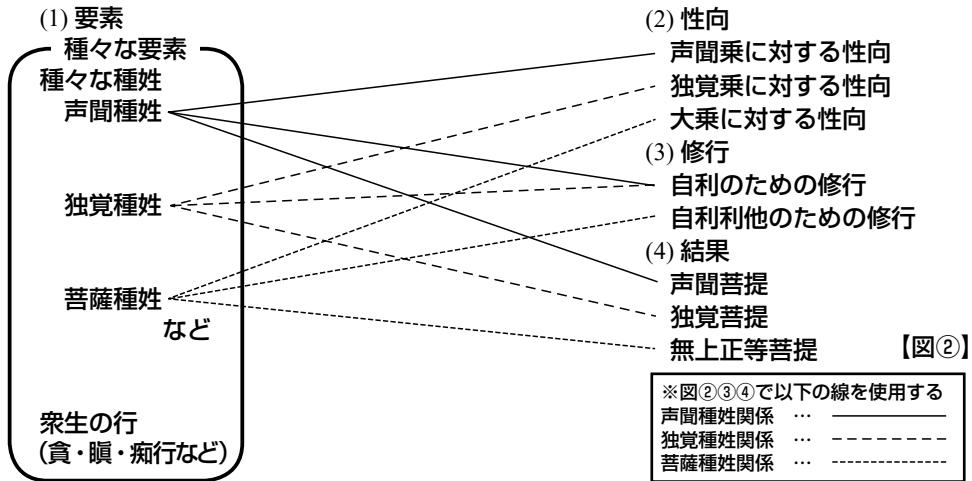
第2偈所説の種姓の4種の存在根拠に対して、4種の根拠と対応する『瑜伽論』の教説の理解を適用するならば、4種の根拠と種姓との関係は、以下のように考えられよう。

(1) 要素は、『菩薩地』『建立品』に拠れば、衆生の持つ種々な要素であり、その中に、声聞・独覚・菩薩の要素、すなわち種姓があるため、種姓は三乗の3種である。(2) 性向は、『菩薩地』『分品』や『声聞地』『第三瑜伽処』に拠れば、声聞乘や独覚乘、大乘に対する性向であり、各乗に対する性向は、(1)要素で示した三乗の種姓を前提条件とする。(3) 修行は、『菩薩地』『種姓品』に拠れば、自利と利他のための修行であり、声聞と独覚は自利のためだけに修行し、

菩薩は自利・利他のために修行する。このような修行の区別が認められるから、声聞・独覚と菩薩との持つ種姓には相違がある。ただし、声聞と独覚ともに自利のために修行するので、声聞種姓と独覚種姓の区別ができない。(4) 結果は、『菩薩地』『種姓品』に拠れば、声聞・独覚・無上正等菩提の3種であり、3種の菩提が認められるから、原因となる種姓は三乗の3種である。

『瑜伽論』の教説を踏まえ、4種の根拠と種姓との関係を図に示すと、【図②】の通りである。

『瑜伽師地論』の教説に基づく『大乘莊嚴經論』「種姓品」第2偈の種姓の存在根拠



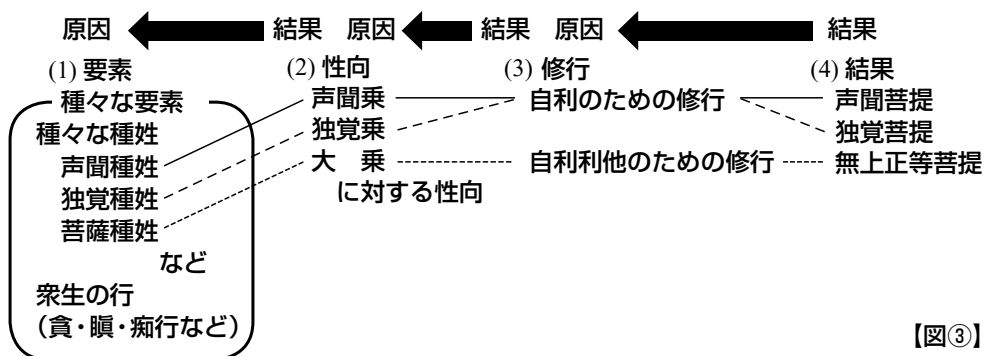
2.2. 種姓の4種の存在根拠における項目順序

さらに、種姓の4種の存在根拠における項目順序に着目すると、4種の根拠は、修行の流れを意図していると理解できよう。すなわち、種々な(1)要素のうちに含まれる声聞・独覚・菩薩の何れかの種姓を持つ者は、種姓と対応する(2)性向があり、対応する乗に対して確信した後、各乗に応じて(3)修行し、各乗における(4)結果である菩提を獲得する。

各項目の因果関係は以下の通りである。(1)要素は、(2)性向の原因である。(2)性向は、(1)要素の結果であり、(3)修行の原因である。(3)修行は、(2)性向の結果であり、(4)結果の原因である。(4)結果は、(3)修行の結果である。つまり、(4)結果から始まる結果の区別に基づいて、(3)修行から始まる原因の区別を段階的に保証していくのである。

4種の根拠における項目順序の関係を図に示すと、【図③】の通りである。

『瑜伽師地論』の教説に基づく種姓の4種の存在根拠における項目順序



3. 第2偈に対するヴァスバンドゥの註釈

『莊嚴經論』の偈頌が成立した後の展開として、第2偈に対するヴァスバンドゥの註釈を取り上げ、第2偈における種姓の4種の存在根拠と対応する『瑜伽論』の教説との相違点を検討し、ヴァスバンドゥの註釈の独自性を明らかにしていこう。

第2偈に対するヴァスバンドゥの註釈は、種姓の4種の存在根拠ごとに註解を施す。

MSABh (Skt.) MSA_L 10.15-11.1, MSA_F 20.11-19, cf. (Tr.) Thurman [2004: 23-24], 長尾 [2007: 68]:

nānā-dhātukatvāt sattvānām aparimāno dhātu-prabhedo yathōktam *Akṣarāśi-sūtre* / tasmād evaṃ-jāṭiyako 'pi dhātu-bhedaḥ pratyetavya iti / asti yāna-traye gotra-bhedaḥ / adhimukti-bhedo 'pi sattvānām upalabhyate prathamata eva kasya-cit kva-cid eva yāne 'dhimuktir bhavati so 'ntareṇa gotra-bhedaḥ na syāt / utpāditāyām api ca pratyaya-vaśenādhimuktau pratipatti-bheda upalabhyate kaś-cin nirvodhā bhavati kaś-cin nēti so 'ntareṇa gotra-prabhedaḥ na syāt / phala-bhedaś cōpalabhyate hīna-madhyā-viśiṣṭā bodhayaḥ so 'ntareṇa gotra-bhedaḥ na syāt bījānurūpatvāt phalasya /

[和訳] (1) 衆生たちには種々な要素があるから、要素の区別の量り知れないことは、『アクシャ樹果の堆積の経』¹³に説かれた通りである。そ〔の経典〕に基づいて、要素の区別が、この様な種類を有するものであることもまた認められるべきである。それ故、三乗に関する種姓の区別が存在する。(2) 衆生たちには性向の区別もまた認識される。実に初めから、或る者には或る乗だけに対する性向 (adhimukti) がある。そ〔の性向の区別〕は、種姓の区別なしにはあり得ないであろう。(3) 条件によって〔或る乗だけに対する〕確信 (adhimukti) が起こされた場合でもまた、修行の区別が認識される。或る者は〔或る乗における修行を〕成し遂げるのであり、或る者はそうでないから、そ〔の修行の区別〕は、種姓の区別なしにはあり得ないであろう。(4) そして、結果の区別が認識される。〔すなわち、〕低級・中級・上級の菩提である。そ〔の結果の区別〕は種姓の区別なしにはあり得ないであろう。結果は種子に従うものであるから。

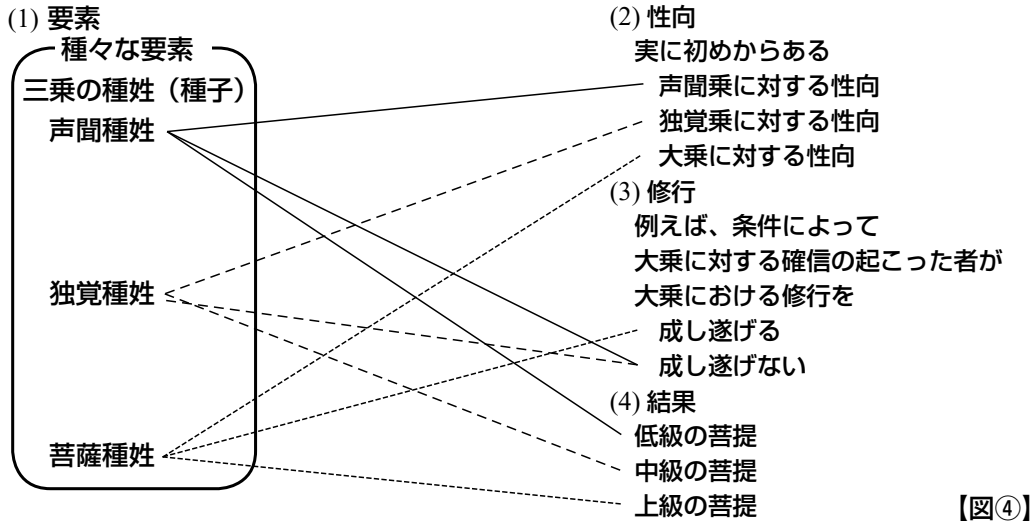
第2偈所説の4種の根拠に対するヴァスバンドゥの註釈に拠れば、4種の根拠と種姓との関係は、以下のように考えられよう。

(1) 要素は、『アクシャ樹果の堆積の経』に説かれたような衆生の持つ種々な要素であり、その種々の中に、三乗の種姓の区別が存在する。すなわち、要素の区別が経典に認められるから、要素の同義語である種姓の区別もまた存在する¹⁴。(2) 性向は、本来的に有する三乗の何れかに対する性向であり、性向の区別は、種姓の区別なしにあり得ない。(3) 修行は、具体的に何を指すかは明らかでないが¹⁵、(2) 性向のような本来的な性向に応じた三乗の修行の区別ではなく、条件によって或る乗に対する確信が起こされた場合、或る乗における修行を成し遂げるか否かの区別である。すなわち、条件によって種姓と対応する乗に対して確信した者は修行を成し遂げるが、種姓と対応しない乗に対して確信した者は修行を成し遂げない。このような修行の区別は、性向ではなく、種姓の区別なしにあり得ない。(4) 結果は、低級・中級・上級の菩提であり、原因である種子に従うので、結果の区別は、種子の同義語である種姓の区別なしにあり得ない。

第2偈に対して、ヴァスバンドゥの註釈は、種々な要素のうち三乗の種姓を含める (1) 要素を除いて、(2) 性向・(3) 修行・(4) 結果の区別の原因を、種姓の区別に直接求め、これら4項目が、【2.2. 種姓の4種の存在根拠の項目順序】で指摘したような修行の流れを意図する項目順序で説示されたと考えていない。

ヴァスバンドゥの註釈に基づいて、4種の根拠と種姓との関係を図に示すと、【図④】の通りである。

ヴァスバンドゥの註釈に基づく『大乘莊嚴經論』「種姓品」第2偈の種姓の存在根拠



【図④】

3.1. 『瑜伽師地論』の教説およびヴァスバンドゥの註釈の比較

先に取り上げた第2偈における種姓の4種の存在根拠と対応する『瑜伽論』の教説および第2偈に対するヴァスバンドゥの註釈を比較し、その相違点を検討しよう (【図②】【図④】も参照)。

まず、(1) 要素に関して、種々な要素のうち三乗の種姓を含める点で、『瑜伽論』の教説とヴァスバンドゥの註釈は共通する。ヴァスバンドゥの註釈はさらに、『アクシャ樹果の堆積の経』を取り上げ、種々な要素の存在を述べるが、『瑜伽論』にも、種々な要素に関連する文脈にこの経典が見出される¹⁶。ただし、種々な要素と種姓が並んで確認できるのは、『菩薩地』「建立品」の教説のみである¹⁷。次に、(2) 性向に関して、三乗の何れかに対する性向という点で、『瑜伽論』の教説とヴァスバンドゥの註釈の理解に相違はない。しかし、ヴァスバンドゥの註釈は、衆生の持つ *adhimukti* を、本来的な性向か、条件によって起こされた確信かに分ける点に特徴がある。そして、三乗の種姓と対応関係にあるのは、本来的な性向である。条件によって起こされた確信については、次項の (3) 修行で取り上げられる。(3) 修行に関して、ヴァスバンドゥの註釈は、声聞と独覚は自利のためだけに修行し、菩薩は自利・利他のために修行する、という『菩薩地』「種姓品」の教説を採用しない。条件によって或る乗に対して確信が起こされても、或る乗における修行を成し遂げられるか否かの区別が、種姓の区別に依拠していると説くのである。修行する乗と対応する種姓を持つ者だけが、修行を成し遂げ、三乗における修行が三乗の種姓と対応するため、『菩薩地』「種姓品」の教

説のように声聞種姓と独覚種姓を区別できない、という問題を解消している¹⁸。最後に、(4) 結果に関して、低級・中級・上級の菩提の3種は、順次、声聞・独覚・無上正等菩提と対応すると考えられるので¹⁹、『瑜伽論』の教説とヴァスバンドウの註釈の理解は同じである。

以上のように、第2偈所説の4種の根拠に関して、ヴァスバンドウの註釈は、多くの点で『瑜伽論』の教説と共通の理解を示す。一方、同註釈は、衆生の持つ *adhimukti* を、本来的な性向か、条件によって起こされた確信かに分ける点に特徴があり、特に後者の条件によって起こされた確信と連動して、(3) 修行に関する理解が『瑜伽論』の教説と異なり、独自性があると言える。

3.2. (3) 修行に対するスティラマティの註釈

次に、第2偈に対するスティラマティ (Sthiramati) の註釈 (**Sūtrālamkāravṛttibhāṣya*) のうち²⁰、ヴァスバンドウの註釈に独自性の認められる (3) 修行への註釈を取り上げよう²¹。

SAVBh (Tib.) C mi 42a5-b1, D mi 42a5-b1, G mi 57b5-58a3, N mi 44a4-b1, P mi 45b6-46a2:

bsgrub¹⁾ pa tha dad dbye ba dang //²⁾

zhes bya ba la / nyan thos kyi rigs can gyi³⁾ gang zag kha cig theg pa (N44a5) chen (P45b7) po'i dge ba'i (G57b6) bshes gnyen gyi rkyen gyi dbang gis theg pa chen po'i rigs can dang 'dra bar theg pa chen po'i chos la mos pa dang dad pa (C42a6) skyes kyang sa (D42a6) dang pha rol tu phyin pa kha cig gis bsgrub nus la / kha cig gis bsgrub mi nus te / (P45b8) dper na (G58a1) 'phags pa shā ri'i (N44a6) sras po lta bu theg pa chen po'i dge ba'i bshes gnyen gyis bsgral⁴⁾ nas bskal pa nyi shur theg pa chen po'i chos spyod pa las phyis mu stegs can gyis mig (C42a7) blangs pa dang / byang chub (D42a7) sems dpa'i spyod (G58a2) pa bsgrub (P46a1) ma nus nas btang ste nyan thos kyi theg pa mya ngan (N44a7) las 'das pa lta bu'o // gal te rigs gcig tu zad na kha cig gis theg pa chen po bsgrub nus na kha cig gis mi nus pa ci'i phyir 'gyur te (P46a2) thams cad kiyis (G58a3) bsgrub nus par (G58a3) 'gyur ba'i rigs (C42b1) so // de ltar na kha cig (D42b1) gis bsgrub nus / kha cig gis bsgrub mi (N44b1) nus pas theg pa gsum gyi rigs so⁶⁾ so na yod do zhes bya ba'i tha tshig ste / 'di ni gtan tshigs gsum pa'o //

¹⁾ *sgrub* GNP, ²⁾ om. GNP, ³⁾ om. GNP, ⁴⁾ *bsgrubs* GNP, ⁵⁾ om. CDGN, ⁶⁾ om. GNP.

[和訳] (3) 修行の区別に基づいて (*pratipattē ca bhedataḥ*)

と言われるのに関して、声聞種姓を持つ或る者は、大乘の善き師友という条件によって、大乘の種姓を持つ者と同じように、大乘の教えに対する確信 (*adhimukti*) と信心 (*śraddhā*) とが起こるけれども、〔十〕地や〔六〕波羅蜜を或る者が修行でき、一方、或る者が修行できない。例えば、聖者シャーリプトラのように、大乘の善き師友 (仏陀) に救われてから、20劫にわたって、大乘の教えを行じた後に、異教徒によって眼を取り出され、そして、菩薩行を修行できずやめて、声聞乗において涅槃したように。もし、種姓がただひとつだけである場合、或る者が大乘を修行できるならば、或る者が〔修行〕できないのはなぜか。すべての者が修行し得る種姓を持つ者である。そうであれば、或る者は修行でき、或る者は修行できないので、三乗の種姓が個々人に存在する、という意味である。以上が第3の原因である。

スティラマティの註釈は、(3) 修行に関して、ヴァスバンドウの註釈を踏襲して、声聞種姓を持つ者は、大乘の善き師友を条件として、大乘の種姓を持つ者と同様に、大乘に対して確信が起こるが、十地や六波羅蜜を或る者は修行でき、或る者は修行できない、と解説し²²、確信が起こる条件や大乘の修行に関して補足する。さらに、同註釈は、シャーリプトラが眼を失う説話を持ち出し、声聞種姓を持つ者は、大乘に対して確信が起こったとしても、最終的に大乘における修行を翻して、声聞乗において涅槃することを強調して、(3) 修行に関する理解を確かなものに行っていると云える。

なお、スティラマティの註釈に、シャーリプトラが眼を失う説話が確認できることは、重要な意味を持つ。この説話は、『大智度論』に伝えられることが知られるが²³、スティラマティの註釈にも見出せることは、これまで指摘されていない。両書の伝承間に若干の異同はあるが、インドにおいて共有されていた説話と言えよう²⁴。

3.3. 小結

『莊嚴經論』の偈頌が成立した後の展開として、第2偈に対するヴァスバンドウの註釈を取り上げ、第2偈における種姓の4種の存在根拠と対応する『瑜伽論』の教説との相違点に着目した。

ヴァスバンドウの註釈は、(3) 修行に関して、『菩薩地』「種姓品」の教説を採用せず、衆生の持つ *adhimukti* を、本来的な性向か、条件によって起こされた確信かに分けた上で、条件によって起こされた確信と連動させて、(3) 修行を理解する点に独自性がある。すなわち、条件によって或る乗に対して確信が起こされても、或る乗における修行を成し遂げられるか否かの区別が、種姓の区別に依拠していると説くのである。この場合、修行する乗と対応する種姓を持つ者だけが、修行を成し遂げることができる、という三乗における修行と三乗の種姓の対応関係がある。したがって、ヴァスバンドウの註釈は、『菩薩地』「種姓品」の教説のように声聞種姓と独覚種姓を区別できない、という問題を解消している。また、(3) 修行に対するスティラマティの註釈は、ヴァスバンドウの註釈を踏襲しつつ、シャーリプトラが眼を失う説話を持ち出し、(3) 修行に関する理解を裏打ちしている。

おわりに

以上の考察から明らかになった点をまとめると、以下のことが『莊嚴經論』における種姓の存在根拠に関して指摘できる。

『莊嚴經論』「種姓品」第2偈は、種姓の存在根拠として、(1) 要素・(2) 性向・(3) 修行・(4) 結果の4種を挙げ、各々に区別が認められることから、三乗の種姓の存在することを述べる。同論書は、「種姓品」の主題を列挙する第1偈の後、まず初めに第2偈において、種姓の4種の存在根拠を示し、種姓の存在を明らかにする。『莊嚴經論』における種姓説の中でも、種姓の存在することを重視していると言える。

種姓の4種の存在根拠は、『莊嚴經論』の偈頌の成立前として、『瑜伽論』を辿ると、各根拠と対応する教説が見出される。(1) 要素は、『菩薩地』「建立品」に拠れば、衆生の持つ種々

な要素であり、その中に、声聞・独覚・菩薩の種姓を包含する。(2) 性向は、『菩薩地』「分品」や『声聞地』「第三瑜伽处」に抛れば、声聞乗や独覚乗、大乘に対する性向であり、各乗に対する性向は、三乗の種姓を前提条件とする。(3) 修行は、『菩薩地』「種姓品」に抛れば、自利と利他のための修行であり、声聞と独覚は自利のためだけに修行し、菩薩は自利・利他のために修行する。ただし、声聞と独覚ともに自利のために修行するので、声聞種姓と独覚種姓を区別できない。(4) 結果は、『菩薩地』「種姓品」に抛れば、声聞・独覚・無上正等菩提の3種である。以上の『瑜伽論』の教説は、三乗の種姓の存在を前提として、4種の根拠となる項目の区別を述べる。一方、『莊嚴経論』は、三乗の種姓の存在を前提とせずに、4種の根拠に基づいて、三乗の種姓の存在を主張し、種姓の存在を明らかにすることに重点を置く。さらに、4種の根拠は、修行の流れを意図した項目順序で説示していると理解できる。すなわち、種々な(1)要素のうちに含まれる声聞・独覚・菩薩の何れかの種姓を持つ者は、種姓と対応する(2)性向があり、対応する乗に対して確信した後、各乗に応じて(3)修行し、各乗における(4)結果である菩提を獲得する。

『莊嚴経論』の偈頌が成立した後の展開として、第2偈に対するヴァスバンドウの註釈は、(3)修行に関して、『菩薩地』「種姓品」の教説を採用しない点に相違がある。同註釈は、衆生の持つ *adhimukti* を、本来的な性向か、条件によって起こされた確信かに分けた上で、条件によって起こされた確信と連動させて、(3)修行を理解する。すなわち、条件によって或る乗に対して確信が起こされても、修行する乗と対応する種姓を持つ者だけが、修行を成し遂げることができる、という三乗における修行と三乗の種姓の対応関係を見出すのである。したがって、ヴァスバンドウの註釈は、『菩薩地』「種姓品」の教説のように声聞種姓と独覚種姓を区別できない、という問題を解消している。また、ヴァスバンドウの註釈に対して、ステイラマティの註釈は、シャーリプトラが眼を失う説話に基づいて、(3)修行に関する理解を裏打ちする点で有益である。

以上のように、『莊嚴経論』の偈頌は、『瑜伽論』の教説に項目上の対応が見出される。しかし、各項目に対する解説に関して、『瑜伽論』の教説に基づく理解に問題のある場合、ヴァスバンドウの註釈は、『瑜伽論』とは異なる理解を示していることを確認した。さらに、ヴァスバンドウの註釈に対して、ステイラマティの註釈は、シャーリプトラが眼を失う説話によって、(3)修行に関する理解を裏打ちする、という論の補強が認められた。

本稿では、『莊嚴経論』「種姓品」で種姓の存在根拠を主題とする第2偈を中心に考察した。今後は、『瑜伽論』『莊嚴経論』間で種姓説の項目上の対応が認められながら、各項目に対する解説においては、対応する『瑜伽論』の教説と『莊嚴経論』に対するヴァスバンドウの註釈との間で内容が相違する「種姓品」第3偈や第11偈についても検討し、ヴァスバンドウの註釈の独自性や同註釈以降の種姓説の展開を明らかにしたい。

《略号一覧および一次文献》

- BBh *Bodhisattvabhūmi*, (Tib.) D (4037) wi 1b1-213a7, P [110] (5538) zhi 1a1-247a8, (Ch.) T [30] (1579) 478b7-577c16.
- BBh_D *Bodhisattvabhūmi*, (Skt. ed.) Dutt [1966].
- BBh_I *Bodhisattvabhūmi*, (Skt. ed.) 磯田・古坂 [1995].
- BBh_{wo} *Bodhisattvabhūmi*, (Skt. ed.) 荻原 [1971].
- BBhVy *Yogācārabhūmau Bodhisattvabhūmivākyā*, (Tib.) C yi 1b1-344a7, D (4047) yi 1b1-338a7, G ri 1b1-512a6, N mdo ri 1b1-399a4, P [112] (5548) ri 1a1-425a6.
- C チベット大蔵経 チョネ (Co ne) 版.
- Ch Chinese translation.
- D チベット大蔵経 デルゲ (sDe dge) 版.
- G チベット大蔵経 ガンデン (dGa' ldan) 金写本.
- MSA *Mahāyānasūtrālamkāra*, (Tib.) kārikā D (4020) phi 1a1-39a4, P [108] (5521) phi 1a1-43b3, bhāṣya D (4026) phi 129b1-260a7, P [108] (5527) phi 135b7-287a8, (Ch.) T [31] (1604).
- MSA_F *Mahāyānasūtrālamkāra*, (Skt. ed.) 舟橋 [1985].
- MSA_L *Mahāyānasūtrālamkāra*, (Skt. ed.) Lévi [1983a].
- MSABh *Mahāyānasūtrālamkārabhāṣya*.
- MSAT *Mahāyānasūtrālamkāraṭīkā*, (Tib.) D (4029) bi 38b6-174a7, P [108] (5530) bi 45a5-196a7.
- N チベット大蔵経 ナルトン (sNar thang) 版.
- P チベット大蔵経 北京 (Peking) 版.
- SkT Sanskrit.
- *SkT Sanskrit reconstruction.
- ŚrBh *Śrāvakabhūmi*.
- ŚrBh_{T2} *Śrāvakabhūmi*, (Skt. ed.) 声聞地研究会 [2007].
- ŚrBh_{T3} *Śrāvakabhūmi*, (Skt. ed.) 声聞地研究会 [2008].
- SAVBh **Sūtrālamkāravṛttibhāṣya*, (Tib.) C mi 1b1-tsi 266a7, D (4034) mi 1a1-tsi 266a7, G mi 1b1-tsi 393a6, N mdo mi 1a1-tsi 298a4, P [108-109] (5531) mi 1a1-tsi 308a8.
- T 大正新脩大蔵経.
- Tib Tibetan translation.
- ViS *Viniścayasamgrahaṇī*, (Tib.) D (4038) zhi 1b1-zi 127a4, P [110-111] (5539) zi 1a1-i 142b7, (Ch.) T [30] (1579) 579a4-749c18.
- 莊嚴經論 大乘莊嚴經論 (*Mahāyānasūtrālamkāra*).
- 智度論 大智度論, (Ch.) T [25] (1509) 57a4-756c19.
- 瑜伽論 瑜伽師地論 (*Yogācārabhūmi*).

《参考文献》

Dutt, Nalinaksha

[1966] *Bodhisattvabhūmi, [Being the XVth Section of Asangapada's Yogācārabhūmi]*, Tibetan Sanskrit Works Series vol. 7, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna.

藤谷昌紀

[2002] 「敦煌本『本業瓔珞經疏』の引用経論について」、『大谷大学大学院研究紀要』19、pp. 101-125。

舟橋尚哉

[1985] 『ネパール写本対照による大乘莊嚴経論の研究』、国書刊行会。

袴谷憲昭

[1979] 「*Viniścayasamgrahaṇī* におけるアーラヤ識の規定」、『東洋文化研究所紀要』79、pp. 1-79; repr. 『唯識思想論考』、大蔵出版、2001、pp. 362-445。

[1981] 「三乗説の―典拠― *Akṣarāśi-sūtra* と *Bahudhātuka-sūtra*」、『古田紹欽博士古稀記念論集 仏教の歴史的展開に見る諸形態』、創文社、pp. 127-142; repr. 『唯識思想論考』、大蔵出版、2001、pp. 236-251。

磯田熙文・古坂紘一

[1995] 『瑜伽師地論菩薩地〈随法・究竟・次第瑜伽處〉』、チベット佛典研究叢書 第三輯、法藏館。

梶山雄一・赤松明彦

[1989] 『大智度論』、大乘仏典〈中国・日本篇〉第1巻、中央公論社。

楠本信道

[1999] 「大乘莊嚴経論における‘adhimukti’の意味」、『印度學佛教學研究』47-2、pp. 912-910。

Lamotte, Étienne

[1981] *Le Traité de la Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna (Mahāprajñāpāramitāsāstra)*, Tome II, Chapitres XV-XXX, Peeters, Louvain-la-Neuve (First edition 1949).

Lévi, Sylvain

[1983a] *Mahāyāna-sūtrālamkāra, exposé de la doctrine du Grand Véhicule*, Tome I, Rinsen Book Co., Kyoto (First edition 1907).

[1983b] *Mahāyāna-sūtrālamkāra, exposé de la doctrine du Grand Véhicule*, Tome II, Rinsen Book Co., Kyoto (First edition 1911).

松本史朗

[1982] 「Madhyamakāloka の一乗思想 ―一乗思想の研究 (I)―」、『曹洞宗研究員研究生研究紀要』14、pp. 301-255。

長尾雅人

[2007] 『『大乘莊嚴経論』和訳と註解 ―長尾雅人研究ノート― (1)』、長尾文庫。

那須円照

[2010] 『『瑜伽師地論』『菩薩地』における如来の十力の研究 (1) ―和訳と註解―』、『佛教學研究』66、pp. 31-50。

岡田英作

[2011]「瑜伽行派における種姓論の展開に関する一考察 —『菩薩地』「種姓品」と『大乘莊嚴經論』「種姓品」—、『密教学会報』49、pp. 120-105。

[2014]『『大乘莊嚴經論』「種姓品」における種姓説 —『瑜伽師地論』における種姓説の受容をめぐって—、『佛教史學研究』57-1、pp. 20-38。

声聞地研究会

[2007]『瑜伽論 声聞地 第二瑜伽処 付非三摩呬多地・聞所成地・思所成地 —サンスクリット語テキストと和訳—、大正大学総合仏教研究所研究叢書第18巻、山喜房佛書林。

[2008]「梵文声聞地 (二十二) — 第三瑜伽処 (1) 和訳・科文—、『大正大学総合仏教研究所年報』30、pp. 1-79。

相馬一意

[1986]「梵文和訳「菩薩地」(1) — 種姓の章、発心の章 —、『佛教學研究』42、pp. 1-26。

勝呂信静

[1989]『『大乘莊嚴經論』と『菩薩地』』、『初期唯識思想の研究』、春秋社、pp. 332-398。

Thurman, Robert A.F. et al.

[2004] *The Universal Vehicle Discourse Literature (Mahāyānasūtrāṃkāra)*, American Institute of Buddhist Studies, New York.

宇井伯寿

[1958]「菩薩地と大乘莊嚴經論」、『瑜伽論研究』、岩波書店、pp. 43-81。

荻原雲来 (Wogihara, Unrai)

[1971]『梵文菩薩地經』、山喜房佛書林 (First edition 1930-1936)。

山部能宜

[1987]「初期瑜伽行派に於ける界の思想について —Akṣarāsīsūtra をめぐって—、『待兼山論叢 哲学篇』21、pp. 21-36。

《註》

¹ Lévi [1983b: 10-11] (First edition 1911) による指摘を端緒とする。

² 拙稿に先立つ研究として、宇井 [1958] や勝呂 [1989] がある。拙稿 [2014] 参照。

³ 第1偈が列挙する第2偈の主題は、存在すること (satva) である (MSA (Skt.) MSA_L 10.8-9, MSA_F 20.3-4, cf. (Tr.) Thurman [2004: 23], 長尾 [2007: 67])。ヴァスバンドゥの註釈は、存在することに対して、種姓の存在すること (gotrasyaśtītvam) と解説する (MSABh (Skt.) MSA_L 10.7-11, MSA_F 20.2-7, cf. (Tr.) Thurman [2004: 23], 長尾 [2007: 67])。スティラマティの註釈は、存在することに対して、声聞・独覚・仏の種姓を持つ者の存在することと解説する。

SAVBh (Tib.) C mi 41a5, D mi 41a5, G mi 56a6-7, N mi 43a3-4, P mi 44b4-5:

yod dang

zhes bya ba ni nyan thos kyi rigs can yang ^(P44b5) yod / rang sangs rgyas kyi rigs can yang yod / sangs rgyas kyi rigs ^(G56a7)
can yang yod par bstan ^(N43a4) to zhes bya ba'i tha tshig go //

[和訳] 存在すること (satva)

と言われるのは、声聞種姓を持つ者も存在し、独覚種姓を持つ者も存在し、仏種姓を持つ者も存在すると示す、という意味である。

- 4 ヴァスバンドウの註釈は、第2偈を種姓の存在することを弁別する偈と解説する。

MSABh (Skt.) MSA_L 10.11-12, MSA_F 20.8, cf. (Tr.) Thurman [2004: 23], 長尾 [2007: 68]:

¹⁾ gotrāstitva-vibhāge ślokaḥ /

¹⁾ add. *anena* MSA_L.

[和訳] 種姓の存在することの弁別について偈が1つある。

- 5 菩薩種姓は、仏陀や如来や大乘の種姓とも言い換えられ得る語であり、『瑜伽論』で統一されていない。本稿では何れも同じ種姓を指すと見做す。
- 6 楠本 [1999] は、幅広い時代の仏教文献の検討を通して、*adhimukti* の意味を「傾注、専心」「確信」「傾向」「確定」に整理する。
- 7 種姓の存在することに関する説示の重要性は、中観派論師カマラシーラ (Kamalaśīla) が『中観明』 (*Madhyamakāloka*) において一乗思想を扱う箇所、『莊嚴經論』「種姓品」第2偈に相当する瑜伽行派の主張を否定することからも認められる。松本 [1982] 参照。
- 8 拙稿 [2011] では、『菩薩地』「種姓品」と『莊嚴經論』「種姓品」との教説の対応関係を示し、拙稿 [2014] では、「種姓品」全偈頌および『瑜伽論』の対応関係を示した。
- 9 『菩薩地』に対する註釈であるサーガラメーガ (Sāgaramegha) 著『菩薩地解説』 (*Bodhisattvabhūmivyākhyā*) では、種々な要素は非一な要素であると解説して、種々な種姓の設定を種々な要素、八万にも上る衆生の行を非一な要素と対応させる。

BBhVy (Tib.) C 328a3-5, D 322a7-b2, G 487b1-3, N 376b5-7, P 405a1-4, cf. (Tr.) 那須 [2010: 50]:

snga ma bzhin du khams sna tshogs (D322b1, P405a2) dang khams du ma nyid yang dag pa ji lta ba (N376b6) bzhin yang dag par rab tu mkhyen to zhes bya ba la ¹⁾ khams sna tshogs pa (C328a4) nyid ni khams du ma nyid yin te ²⁾ rnam pa gnyis (G487b2) ka bstan pa'i phyir / nyan thos la sogs pa'i rigs (P405a3) kyi dbye ba'am ³⁾ 'dod chags la sogs (N376b7) pa la spyod pa'i spyod pa (D322b2) brygad khri bzhi stong gi dbye ba'am / yang na go rim ⁴⁾ bzhin du khams sna tshogs nyid ni rigs kyi dbye bas so // (C328a5, G487b3) khams du ma nyid ni spyod pa'i dbye bas (P405a4) so //

^{1) 2) 3)} om. GNP, ⁴⁾ rims CD.

[和訳] 先のように、種々な要素と非一な要素とをありのままに正しく知る、と言われるのに関して、種々な要素は非一な要素である。2種ともを示すために、声聞等の種姓の区別や貪等の行の八万四千の行の区別であり、さらにまた、順次、種々な要素は種姓の区別により、非一な要素は行の区別によるのである。

- 10 例えば、『毘婆沙論』(『阿毘達磨大毘婆沙論』(T [27] (1545) 367c25-28)『阿毘曇毘婆沙論』(T [28] (1546) 279c15-17)『鞞婆沙論』(T [28] (1547) 448c5-9))に確認できる。
- 11 漢訳にのみ独覚種姓を持つ者の場合が付加される。

ŚrBh (Ch.) T 449b12-16:

次復爲其說獨覺乘相應言論。彼聞宣說此言論時、若身中有獨覺種姓、於此言論便發最極踊躍歡喜深生信解。若身中有聲聞種姓大乘種姓、則不如是。

- 12 三乗の種姓の存在を前提とするか規定するか、という両論の間の視点の相違が、『菩薩地』「種姓品」と『莊嚴經論』「種姓品」との論を勧める順序の違いにもなっていると考えられる。拙稿 [2011: 111] では、『莊嚴經論』「種姓品」第2・3偈が『菩薩地』「種姓品」の所説の§4-1, 4-2 (2種の清浄, 4種の様相) と対応し、第4偈が§3 (種姓) と対応する、という論を進める順序の入れ替えに関して、『莊嚴經論』が種姓一般に視野を広げているのに対して、『菩薩地』は菩薩種姓に焦点を絞るという、両論書における視点の違いに由来するものと考えられる」と指摘した。三乗の種姓の存在することをまず初めに説示する点で、『莊嚴經論』は種姓一般に視野を広げていると言えよう。
- 13 この經典に関しては、袴谷 [1981] および山部 [1987] を参照。
- 14 要素の区別に基づいて種姓の区別が認められても、ヴァスバンドウの註釈は、その区別が三乗に限定される根拠として十分でないように思われる。
- 15 『莊嚴經論』は、第5章「二利品」(Pratipatty-adhikāra) および第13章「隨修品」(Pratipatty-adhikāra) において、修行 (pratipatti) を主題とする。漢訳は章名を訳し分けるが、サンスクリットは同じである。当該偈頌の修行 (pratipatti) に関しては、これらの章が参照されるべきであろう。『菩薩地』の対応箇所は、各々第3章「自他利品」(Svaparārtha-pāṭala) と第8章「力種姓品」(Balagotra-pāṭala) 所説の法隨法行 (dharmānudharma-pratipatti) である。
- 16 例えば、「撰決撰分」(*Viniścayasamgrahaṇī*) の「五識身相応地意地」に関する箇所において、アーヤ識には種々な要素がある、と解説する教説に見出される。

ViS (Tib.) D zhi 7b3-5, P zi 8b8-9a3, (Ch.) T 581b17-20,

cf. (Tib. ed.) 袴谷 [1979: 39.13-19], (*Skt.) 山部 [1987: 30.5-8], (Tr.) 袴谷 [1979: 64], 山部 [1987: 30]:

bcom ldan 'das kyis kyang kun gzhi rnam par (P9a1) shes pa sa bon thams cad pa 'di la dgongs nas mig gi khams dang / gzugs kyi khams dang / mig (D7b4) gi rnam par shes pa'i khams dang / yid kyi khams dang / chos kyi (P9a2) khams dang / yid kyi mam par shes pa'i khams kyi bar du gsungs te / kun gzhi mam par shes pa la khams sna tshogs yod pa'i phyir ro // mdo nyid las kyang kun gzhi rnam par shes (P9a3) pa la khams (D7b5) du ma yod pa'i phyir ro // ji ltar dbang po'i tshogs kyi dpe mdzad pa lta bu'o //

[和訳] また世尊が、このすべてのものの種子を有するアーヤ識 (*sarva-bījaka ālaya-vijñāna) を意図して、眼の要素と物体の要素と眼の認識の要素、〔乃至〕意の要素と存在の要素と意識の要素までを仰った。〔と

いうのも、] アーラヤ識には種々な要素があるから。経中にも、アーラヤ識には非一な要素があるから。アクシャ樹果の堆積という譬喩をなされた通りである。

- ¹⁷ スティラマティの註釈 (SAVBh (Tib.) D mi 41b6-42a2, P mi 45a6-b3) は、種々な要素に関連して、三乗の種姓だけでなく、『菩薩地』「建立品」の教説のように貪等の行を併記する。『菩薩地』「建立品」の教説のような考えを共有していたことが考えられよう。
- ¹⁸ このようなヴァスバンドウの *adhimukti* 理解に基づく (2) 性向・(3) 修行に関する解説は、『声聞地』「第二瑜伽処」において、三乗に対する誓願と種姓の関係を規定する教説に類似が認められる。

ŚrBh (Skt.) ŚrBh₁₂ 32.11-34.6, cf. (Tr.) 声聞地研究会 [2007: 33-35]:

tatra praṇidhāna-prabhedenā pudgala-vyavasthānam / asti pudgalaḥ śrāvaka-yāne kṛta-praṇidhānaḥ, asti pratyekabuddha-yāne, asti mahāyāne / tatra yo 'yaṃ pudgalaḥ śrāvaka-yāne kṛta-praṇidhānaḥ sa syāc chrāvaka-gotraḥ, syāt pratyekabuddha-gotraḥ, syān mahāyāna-gotraḥ / tatra yo 'yaṃ pudgalaḥ pratyekāyām bodhau kṛta-praṇidhānaḥ so 'pi syāt pratyekabuddha-gotraḥ, syāc chrāvaka-gotraḥ, syān mahāyāna-gotraḥ / tatra yo 'yaṃ pudgalaḥ mahāyāne kṛta-praṇidhānaḥ so 'pi syāc chrāvaka-gotraḥ, syāt pratyekabuddha-gotraḥ, syān mahāyāna-gotraḥ / tatra yo 'yaṃ pudgalaḥ mahāyāne kṛta-praṇidhānaḥ, sa śrāvaka-gotravād avāyaṃ ante kāle tat-praṇidhānaṃ vyāvartya śrāvaka-yāna-praṇidhāna evāvatisthate / evaṃ pratyekabuddha-yāna-gotro mahāyāna-gotro veditavyaḥ /

tatra bhavaty eṣāṃ pudgalānāṃ praṇidhāna-saṃcāraḥ praṇidhāna-vyatikaraḥ / no tu gotra-saṃcāraḥ, gotra-vyatikaraḥ / asmimṣu tv arthe śrāvaka-yāna-praṇidhānaḥ śrāvaka-gotrāś caite pudgalā veditavyaḥ / evaṃ praṇidhāna-prabhedenā pudgala-vyavasthānaṃ bhavati //

[和訳] その〔人の設定〕中で、誓願の区別による人の設定がある。〔すなわち、〕声聞乗に対して誓願を為した人がいる。独覚乗に対して〔誓願を為した人〕がいる。大乘に対して〔誓願を為した人〕がいる。その中で、声聞乗に対して誓願を為したこの人は、声聞種姓を持つ者であろう、独覚種姓を持つ者であろう、大乘種姓を持つ者であろう。その中で、独覚に対して誓願を為したこの人もまた、独覚種姓を持つ者であろう、声聞種姓を持つ者であろう、大乘種姓を持つ者であろう。その中で、大乘に対して誓願を為したこの人もまた、声聞種姓を持つ者であろう、独覚種姓を持つ者であろう、大乘種姓を持つ者であろう。

その中で、独覚菩提あるいは無上正等菩提に対して誓願を為した声聞種姓を持つこの人は、声聞種姓を持つ者であるから、必然的に最後にはその誓願を翻して、声聞乗の誓願のみが確定する。同様に、独覚乗種姓を持つ者、大乘種姓を持つ者が知られるべきである。

そこで、これらの人々には〔各乗に対する〕誓願を転向すること、誓願を取り換えることがある。しかし、〔各乗の〕種姓を転向すること、種姓を取り換えることはない。そして、この意味で、声聞乗に対する誓願を持ち、声聞種姓を持つこれらの人々が知られるべきである。以上のように誓願の区別による人の設定がある。

この教説は、誓願には、種姓と対応する誓願と、種姓と対応しない誓願があり、三乗の何れかに対して誓願を為しても、種姓と対応する乗でなければ、その誓願を翻して、対応する乗に対する誓願を確定させる、という誓願と種姓の関係規定する。誓願を為す乗と対応する種姓を持つ者だけが、誓願を確定させ、誓願は、種姓に応じて決まると理解できる。(2) 性向・(3) 修行との類似点は以下の通りである。(2) 性向における種姓と対応する本来的な性向は、種姓と対応する誓願と類似し、(3) 修行において、条件によって種姓と対応する乗に対して確信した者は修行を成し遂げるが、種姓と対応しない乗に対して確信した者は修行を成し遂げない、という区別は、種姓と対応する誓願は確定するが、種姓と対応しない誓願は翻るといふ点と類似すると言えよう。

- ¹⁹ スティラマティの註釈 (SAVBh (Tib.) D mi 42b1-4, P mi 46a2-6) も同様の理解を示す。

- ²⁰ SAVBh (Tib.) D mi 41b5-43a2, P mi 45a5-46b4. スティラマティの他にアスヴァパーヴァ (Asvabhāva) の註釈 (*Mahāyānasūtrālamkāraṭīkā*) があるが、第2偈に対するヴァスバンドウの「衆生たちには種々な要素があるから、要素の区別の量り知れないことは、『アクシャ樹果の堆積の経』に説かれた通りである」(*nānā-dhātukatvāt sattvānām aparimāṇo dhātu-prabhedo yathoktam Akṣarāśi-sūtre*) という註釈への複註 (MSAT (Tib.) D 51a3-b2, P 58a2-8) のみである。アスヴァパーヴァは、『アクシャ樹果の堆積の経』を引用し、引用中の「界」(*dhātu*) が何を意味するかについて、『多界経』に拠れば多種であると述べる。さらに、「種姓品」における同義語として、種姓・種子・要素・原因を挙げ、貪等の行の区分が存在するように、三乗の種姓の区別も存在するとし、種姓の異なりがなければ、乗の異なりも妥当でないと説く。なお、アスヴァパーヴァの註釈とほぼ同文がスティラマティの註釈 (SAVBh (Tib.) D mi 42b4-43a2, P mi 46a6-b4) にも示される。両釈の内容に関しては、長尾 [2007: 69, 註 4] が要約して取り上げる。

- ²¹ (1) 界・(2) 性向・(4) 結果への註釈 (SAVBh (Tib.) D mi 41b6-42a2, P mi 45a6-b3, D mi 42a2-5, P mi 45b3-6, D mi 42b1-4, P mi 46a2-6) は、本稿で扱わない。

- ²² 十地や六波羅蜜を修行できる或る者に関して、声聞種姓を持つ者が大乘の種姓を持つ者か、という問題がある。本稿では、大乘の種姓以外の者が大乘における修行を為し得た場合、修行の区別に基づいて種姓の区別が見出せなくなることから、十地や六波羅蜜を修行できる或る者を、大乘の種姓を持つ者と理解した。このような理解は、この直後にスティラマティの註釈が引くシャーリプトラが眼を失う説話の通りに、声聞種姓を持つ者は、大乘に対して確信が起こつても、最終的に大乘における修行を翻して、声聞乗において涅槃することを強調する点や、この説話に続く問答において、修行の可否によって三乗の種姓が個々人に存在すると述べる点からも支持されよう。

- ²³ 智度論 (Ch.) T 145a17-29, cf. (Tr.) Lamotte [1981: 701-702], 梶山・赤松 [1989: 157-158]:
問曰。云何名不到彼岸。答曰。譬如渡河未到而還、名爲不到彼岸。如舍利弗於六十劫中行菩薩道、欲渡布施河。時有乞人來乞其眼。舍利弗言。「眼無所任。何以索之。若須我身及財物者、當以相與。」答言。「不須汝身及以財物。唯欲得眼。若汝實行檀者、以眼見與。」爾時舍利弗出一眼與之。乞者得眼、於舍利弗前嗅之、嫌臭、唾而棄地、又以脚蹋。舍利弗思惟言。「如此弊人等難可度也。眼實無用而強索之、既得而棄、又以脚蹋。何弊之甚。如此人輩不可度也。不如自調、早脫生死。」思惟是已。於菩薩道退、迴向小乘。是名不到彼岸。
- ²⁴ 藤谷 [2002] は、偽經である『菩薩瓔珞本業經』に対する註釈『本業瓔珞經疏』において、シャーリプトラが眼を失う説話の出典とされる經典『七非空藏經』に着目する。同研究は、『七非空藏經』の「七非」を「虚」の誤写と考え、『虚空藏經』と呼ばれるべき經典であったことを指摘する。しかし、現存する經典中には、『虚空藏經』と呼ばれる可能性のある經典を見出せないという。

〔付記〕本研究は平成26年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（京都大学大学院 日本学術振興会特別研究員 DC 高野山大学密教文化研究所受託研究員）

<キーワード> *Yogācārabhūmi, Mahāyānasūtrālaṅkāra, gotrāstitva, adhimukti, pratipatti.*

